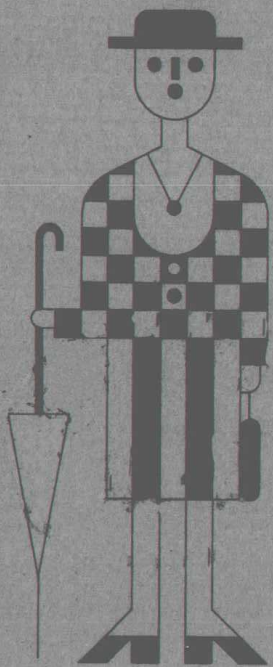


犬養道子 暮しの設計

女が外に出るとき



女が外に出るとき



犬養道子 暮しの設計 中央公論社

女が外に出るとき

© 1964 検印廃止

定価 360 円

昭和 39 年 11 月 25 日 初版印刷 昭和 39 年 11 月 30 日 初版発行

著者 犬養 道子 発行者 宮本信太郎 印刷 三陽社

発行所 中央公論社 東京・京橋 2-1

振替 東京 34

協和製本

目 次

女が外に出るとき	五
ひとりと一台	三七
整理の整理	五六
暮しのあした	七五
手つだいと肩がわり	九四
社会人の基礎・しつけ	一一七
ケンと犬と人	一三九
外国人とのつきあい	一六一
○×式——この不親切な教育	一八八
「日本」をもういちど	二〇九
あとがき	二三〇

挿 装
画 幀

ト 田
シ 中
コ 一
・ 光
ム
ト
ー

女が外に出るとき

女が外に出るとき

1

ある時、私はひとりで住んでいた。厳密に言えば、白い犬一匹と一緒のひとり暮らしである。

なぜ、ある時と限定がつくのか、それはあとで説明する。と言うよりはむしろ、私のひとり暮らしが限定づきの過去完了に終わったそのこと自体が、この原稿のテーマなのである。

私は一戸を構えていた。父母の家の二階につくられた一戸ではあったけれども、完全分離完全独立の一戸で、入口もちろん別、台所、風呂場は言うにおよばず、水道、電気、ガスのメーター一切もまた別であった。

父母には父母の生活がある。父母が年を取って、精神的実地的な援助や、私がそばにいること自体を望むなら、私はそれに喜んで応じるが、すでに成人し職業を持った私の側から、進んで彼らの生活領分に入りこみ、いかなる些細なことがらについてであっても、救いを期待してかかることは正しくないと思ったからである。生活が保証された成人の住まい方は、すべからず完全自治であれ、という

のが、私の信条であり、また九年たつぷりの海外生活によって私が学んだ教訓でもあったのである。

さて、人々は、私が完全自治のひとり暮らしをはじめると聞いて、こんなことを言った。「あなたのよ
うな、ジャーナリズム関係の不規則な仕事を持つていては、犬一匹とのひとり暮らしはとてもとても大
変だ。長つづきはしませんよ。原稿書き、取材旅行、時間なしの仕事、掃除、料理……両立しませんよ」

ところが、この人たちの案じてくれたその意味においては、私のひとり暮らしはけっこううまく行っ
たのである。私は上手下手は別として、料理が好きである。美しくみずみずしい野菜を切ったり、刻
んだり、肉を叩いたり丸めたり、オーブンの熱加減をしらべたり、ビスケットを焼いたりするのは大
好きで、そういうことをしながら、原稿のすじを考えもすれば、きれいさっぱり忘れて、ひたすら料
理を楽しみもする。買出しも好きである。週一度、犬と一緒にスーパーマーケットに行つて七日分の
買物をし、冷蔵庫にきちんと入れて貯える。私にとって、冷蔵庫は「冷やす」ものではない。「貯蔵す
るもの」である。だから、ひとり暮らしでも大型を使う。したがって、毎日買物のための外出の要はない。
壁を、アメリカ時代カレッジ生活のころと同じく、洗ったり塗ったり、床を油でみがいたりするの
も私の趣味に合う。座敷飼いの犬は賢くおとなしく、ちゃんと留守番をしてくれるから、（ただし留守
中の電話の取次ぎはきらいとみえて一度もしたことはない）空巢の心配もなかった。

私は自宅が仕事場である書きものに、最低限の邪魔しか入れたくなかったから、入口には「御用聞
き一切おことわり」と大書し、クリーニング屋さんだけを例外に、ただし、それも毎週×曜の午前中
を限つての木戸御免とした。客との面接日もきめた。留守の多い生活だから、集金人がムダ足をふむ

可能性も多く、それでは気の毒なので、新聞の支払い日は月の最後の日。それが日曜に当たるときはその前日、とも話をつけた。そのほか、突発の用があって来る人のためには、連絡箱という箱を入口において、そこにメモをのこしてもらうようにも手はずをととのえた。

これだけの手を打てば、ひとり暮らしはうまく行く、永久に、私の生きる限りうまく続く、と、私はおろかにも考え、うれしくなって、パートナーである犬を相手にイタリアン・ベルモットで祝盃をあげた。「これだけの手」は、九年を送ったヨーロッパ、アメリカの生活を回顧して、「ひとり暮らし」のための条件をあれこれ教えあげた結果の「手」だったのである。

ところが、

ああ、ところが、である。

ひとり暮らし一週間目、早くも私は大変な誤算に気がついた。

誤算の第一はゴミの問題であった。当時は今とちがい、東京都には定時制収集というルールはなかった。チリンチリンと鐘を鳴らしてゴミ集めをして廻るその車は、いったい、いつ来るのか、皆目わからないのである。午前中來るといふことはわかっているのだが、どの日のどの時間かわからない。しかも、チリンチリンと鳴ったとたんに駆け出さなければ、非情の車はさっさと行ってしまふのである。チリンチリンと聞えた瞬間、手洗いに入ってもいけない、電話をかけていてもいけない、ましてや留守ではいけない。しかしまた、いつ来るかわからぬもののために、手洗いもがまんし、仕事

材料あつめの外出も延ばして、待っているわけにもゆかず、テレビ、ラジオ出演依頼をこたわるわけにもゆかない。

うかつにも、日本の都会住まいの大問題を忘れていたのは、それまで住んでいた四谷の家の庭が広く、木も多かったために、肥料を兼ねて土中に埋めるゴミ片づけですんでいたからである。

新居は二階、庭は父母に属しているから、穴を掘るわけにもいかない。その上私の家はワンルーム形式で、チリンをのかせば台所のゴミは容赦なく腐って悪臭を家中にただよわせる。仕事に疲れて帰る深夜、すっぱい匂いに迎えられるのはたまらなかった。匂いが気になってベッドに入ってからもおちおち出来なかった。

こうしてひとり暮らしは早くも停滞しはじめた。ゴミを片づけるためにチリンをあてどなく待てば、仕事のスケジュールはあとまわしとなる。仕事をとどこおりなくつつければ、ゴミの山と一緒に暮さねばならぬ。

こればかりではなかった。帰宅してみると郵便受けに「書留便を配達したが不在であったから×日までに郵便局に來られたし」などと書いた紙が入っている。集通と呼ばれる配達係からの「書物を配達したがいないかった」という苦情メッセージが入っている。

月の最後の日と約束を交し、向うも了承したはずの集金が、その日に來ないことが度重った。×曜午前中に来るはずのクリーニングが、×曜午後になって、そのため仕事とかちあって用が足りなかったり。×日郵便局へ書留を取りに來られたし、と指定してあるその×日は、朝から夜まで出張の日で

あったり。

私はつくづくと考え込んだ。オランダでもフランスでもアメリカでも、味わったことのない「苦勞」が出て来たのである。欧米では「自動的に」スムーズに動いてゆくことがらが、この国ではてんで動かないのである！

私は父母のところにハンコや金をあずけることを考えた。父母の手伝いの人や秘書にゴミをチリンチリンに渡すことをやってもらおうと考えた。だがしかし、待てよ、と私は思い直した。階下が父母の家だから甘い考えが出て来るのである。他人様の家であつたらどうするだろう。親切な人ならやはり頼むのだろうか。

親切であつたとしても、階下の住人が、やはり私のような職業人で、奥さんも共かせぎ、そのうえ使用人なしであつたら、頼みたくも頼めはしない。

ではおとなりに頼もうか。

おとなりも、またそのおとなりも、昼間は留守の人たちだつたらどうするのだろうか。

しかも実際、向う三軒両となり、共かせぎ職業持ちは増加しつつあるのである。

私は自分ひとりで何とかこの停滞線を突破しようと考えた。階下に声をかけて援助を求めたい誘惑と戦うのはなかなか容易ではなかったが。

手はじめとして、私は大枚二万円を投じ、ディスプレイになるものを買ひ込んだ。もちろん、前も

ってメーカーに性能を聞きただしての上のことである。それは電気仕掛の、いわばゴミ粉碎機で、食品関係の一切の屑を、粉碎しながら水と一緒に流し去る性質を持っている。アメリカの、私が入院をしていたサナトリウムは、町から程遠い野っ原にあって、一切合財自力供給自力処理方法を取り、伝染病菌のいっばいついた、患者の食べのこし一切は、ディスポーザーで片づけていた。私は、犢の骨も、プディングのカスも、一列一体、たちまちに流し去る、あのすばらしいディスポーザーのことを思い出したのである。

それが取り付けられた日、私は、さあ、いよいよ文化生活がはじまるぞ、なぜ早く考えつかなかったのだろう、と、有頂天で喜んだ。さっそくためしてみると、たちまちに屑は消えて、あとかたもない。二万円の価値はあったと思った。

ところが——ああ、ふたたびところが、である。数日後、ディスポーザーは、突然とまって、艇でも動かなくなった。さらに数日後、悪臭を放つドロドロしたものが、うっすらと、にじみ出て来た。私は驚いて施工人を呼んだ。

粉碎刃が、アメリカのそのように強く鋭くないのも一因であった。日本の食品が、アメリカのような大さっぱな屑を出すものところが、小魚の小骨や、ねとねとしたごはん粒を含んで、うまく刃に乘らない種類に属することも一因であった。しかし、「救いの神」の運転停止に、最大の貢献をしたものは、実に日本の下水道の性格にあったのである。

私の家は旧十五区以外の、昔なら郊外と呼ばれた、新地区にある。つまり、本下水は、家のそばを

通っている、私設の細々とした仮下水道が、わずかについていた——というより、その一帯に住む人の私財によって設けられていたにすぎない。アメリカに見られるような、収容力をもつ本格的な下水道が、本下水にすらないとすれば、仮下水の性能がいちじるしく悪いのは当然であった。

この、性能の悪い、（少々変ないい方だが）下水道は、普通の水を受けつけるのがやっつであるから、ドロドロになった比重の重い液体を流し去るところまではとてもゆかない。要するに詰ってしまったのである。（その後、この仮下水はとりこわされて、本下水道がつけられた。しかし、本物の下水道もまた、「収容力」を持っていないということが判明した。日本ではディスポーザーは、まだ普及し得ないのである。だが、それならなぜ、ディスポーザーの市販がゆるされているのか、疑問である）

お金をかけて直せばよいというから、お金をかけて直してもらった。数日はうまく行ったが、またまた駄目になる。直す、停止する、直す、停止する。しまいいは馬鹿々々しくなつて、直すのを止めた。二万円は捨てたことになった。

こうして、世界第一の人口の規模を誇り、オリンピックをさえ迎える大都會での私の「近代生活」は、またまた、いつ来るかわからないゴミ車を、手を束ねて待つ、おそろしく「非近代的」な都会生活らしからぬ状態に逆もどりしたのである。私が都の清掃審議会に乗り込んだのはそれから間もなくのことである。

そうこうするうち、季節は暮になった。おきまりの郵便停滞期である。加えて印刷物郵送料金も値

上りした。高い金を払って、しかもすみやかには着かないということになれば、人は郵便にたよらず、集通という名のメッセンジャーを使用する方法を考えついた。職業がら、私の家のポストには、書留連達の類のほか、各種新刊や、その他の印刷物が放り込まれるのが多かったが、その大半がメッセンジャーによる配達に切りかわった。ところで、メッセンジャーは、とどけた印刷物とひきかえに、受領証明のハンコを要求する。いいかえれば、ハンコを押す人間がひとり、いつときまらぬ時間にやってくる、メッセンジャーのために家の中で待ちかまえていなければならなかったのである。

このハンコ留守番を置かぬ私の家のために可哀想なメッセンジャーは、二日に一度のわりあいで無駄足をふむ。あるいは、せっかく構想をととのえて、仕事に集中しはじめの私が、容赦ない呼びリンにかきみだされる。私はたまりかねて、ある時メッセンジャーをつかまえて、「あなたのためにも私のためにも、ハンコなしということにしましょう。普通の倍の大きさの郵便受けがついているのだから、配達したものはその中にただほうりこんで下さい」と言った。するとメッセンジャーは頭を掻いて、「もちろん、私たちだってそうしたいと思っていますよ。けれども、後日の証拠のために、せひともハンコがいるのです。なぜというと、この仕事の初期にはハンコなしでしたが、それでは、十人にひとりくらいの割合で、たしかに配達を受け取っておきながら、おれのところは受け取っていない、もう一冊持つて来い、と難癖をつけて、本を二冊ただ取りしてしまう人が出て来たからです」と答えた。

聞いて私は無然とした。

そして、アメリカでかつて見た一つの光景をゆくりなくも思い起した。

それは、ポストン近郊のある小さな町の住宅街での光景である。そのあたりには高層アパートはほとんどなく、九割までが、ちんまりとした一戸建の家であり、各戸の門に、思い思いの意匠をこらした、かわいらしい郵便受けが付いていた。

その郵便受けに、毎週数回、赤い小旗や、リボンなどの目じるしがついたものである。それは、電気やガスの集金日に、めぐって歩く集金人相手に「この中にお金が入っていますよ」と告げている合図なのであった。また、この郵便受けに入り切らない大きな包は、おそらくは共かせぎで無人であるう家の玄関口に、無難作に置いてあり、その受取証は、郵便受けの中に他の郵便物と一緒に入っている。受け取った人は、それに署名して、また郵便受けの中に入れ、目じるしの小旗などを出しておく。そうすれば、郵便配達でもメッセンジャーでも、その家への配達物を持っていない日にも、小旗を合図に、郵便受けをさぐって、中から受取証を取り出せるのである。

人口の少い、小さな町だから、そんなのんきなことが出来るのだ、と言うなかれ。

あの町には市民のモラルがあった。モラルを基礎として、しっかりと身についた人間相互の信用と信頼とがあった。それあればこそ、ひるま家をカラにして外に働く要のある者は、安心して外に働き、しかも、メッセンジャーや郵便配達人の仕事は、とどこおることなく動いていたのである。自治はモラルなしには行えない。

難癖をつけ、盲点をねらって、本の一冊、ただどりをもくろむ人がいればこそ、メッセンジャーや配達人は、みすみす無駄足をくりかえしても、ハンコをもらって歩かなければならないのである。

人力と、時間との、なんという無為な使い方か。

だが。

おかしいことは、ここまで「受取証、拠」を気にしなければならないこのわれわれの社会で、証、拠のハンコを押す人間は、必ずしも、「受け取るべき本人」でなくてよいという、大抜穴がゆるされていること、である。犬養道子不在でも、犬養のハンコを、私にかわって押す人がいさえすれば、メッセンジャーは安心して、本をのこしてゆくのである。

犬養などという、奇妙な、全国でも数少ない名は別のこと、田中とか高橋とかの名前なら、金五十円はらえば三文判は手に入る。かりに、共かせぎ毎日不在の田中という家に、ほとんど毎日、メッセンジャー配達の本がとどくということを、ずるい人間が知ったとしよう。ほうきの一本も手に持って、あたかも外まわりを掃除するふりをよそおいながら、メッセンジャーを待ち受け、ふところに用意の田中のハンコを取り出して、「はい受取印」といってさし出せば、本はまんまと手に入るのである。ただどり防止の目的で「ハンコ」を要求するに於ては、ハンコ主義は厳密でも論理的でもない。要するにひたすら形式が尊重されるだけの話である。

日ましにふえるばかりの不都合に、業を煮やした私は、まず、書留だけでも「防止」しなくてはならないと考え、書留をよこす可能性のある会社（というのは、私あての書留はほんのわずかの例外をのぞいて原稿料であるから）に、片はしから電話をかけ、こんご一切、△銀行内犬養道子口座に送っていただ